知床財団がお届けする 知床の自然情報誌SEEDS（シーズ）
公益財団法人 知床財団　発行日 2015年5月8日

# SEEDS

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.226
2015 / 春号

世界遺産
登録
10周年

特集
## 知床の10年
～知床財団スタッフの視点からふり返る～

活動レポート 道を作る
～ホロベツ地区の挑戦～

スタッフの本棚 第16回
リアル

知床財団 購買部
デザインー新！知床Tシャツ

知床財団 この一品 第5回
疲労軽減マット

写真：知床五湖と高架木道

文 - 秋葉圭太　公園事業係長

# 道を作る
## －ホロベツ地区の挑戦－

### ホロベツ秋の社会実験

国立公園指定50周年を迎えた2014年秋、私たちはホロベツ地区で新たな遊歩道（トレイル）を作り、運用する社会実験を行いました。ホロベツ地区は、私たち知床財団の活動拠点であり、公園利用の拠点でもあります。一方で、世界遺産登録後の様々な変化の中で、ホロベツ地区を利用する人々は減少し、国立公園全体の中での役割が見えにくくなってきました。

そこで私たちは2013年に、環境省や斜里町と協力しながら、スタッフがそれぞれの想いとアイディアを持ち寄り、ホロベツ地区の歩みを振り返り、現状を分析し、未来のあり方を提案するホロベツ地区活用検討業務、通称「ホロ活業務」を行いました。ホロ活業務では、ホロベツ地区の将来像として「知床のコンシェルジュ」をコンセプトとし、居心地のよさと充実感のある体験ができる場所を目標にしました。そして、具体的な取り組みとして「遊歩道の再整備」「自然センターの魅力アップ」「デジタルツールによる情報発信」の3つを提案しました。これらを実現するためのアクションプランが、この社会実験です。

実験は、「歩く利用」を前面に打ち出し、既存のフレペの滝遊歩道を含めた4つのトレイルネットワークをホロベツ地区に設定したものです。新たなコースは全てしれとこ100平方メートル運動地の中にあることから、トラスト運動の普及と公開を大きな目的のひとつとし、「森づくりの道」と名付けました。また、すべてのトレイルの起点と終点を自然センターに集約し、レクチャーなどによる情報の受発信を強化して、施設の活用を図りました。

折しも知床最大の観光地である知床五湖は、工事のために10月13日に「早期閉園」してしまうことが決まっていました。これを逆手にとり、社会実験は10月14日から実施することとし、五湖に行くことができない利用者の受け皿とする作戦をたてました。

### ホロベツ秋の社会実験

実験は、道をつくることが目的ではありません。利用者が訪れ、興味を持ち、そこを歩いてもらい、知床の開拓と自然保護の歴史を「体感」してもらうことが重要なポイントです。なによりも私たちの伝えたいメッセージは、利用者が体を動かし、楽しむ中で気づいてもらうことに意味があるのです。体を使いながら、来訪者の知的好奇心を刺激する仕掛けが必要です。

初夏のころから、まずはトレイル作りの準備作業が本格的に始まりました。コースはあらかた決めていたものの、現地をみながら修正しなければなりません。現地を歩いてみると、開拓時代の遺構や作業道の跡が次々と見つかりました。トレイルはなるべくこうした「過去の基盤」の上に作ろうということになりました。

開拓時代の遺構（家畜の水飲み場）

新しいトレイルを作るという取り組みは、知床財団にとってはほぼ初めてといってよいもので、経験のあるスタッフはほとんどいませんでした。それでも、日々知床の森で作業をする自然復元チームのアドバイスや援助に非常に助けられました。スタッフは、ほかの仕事の合間をみては、かわるがわる運動地に通い、刈り払い作業を進めました。

もっとも苦労したのは、ロングコースの終盤です。台地の上から岩尾別川に下る場所は、急勾配で道路も近く、路盤がもろいところが多々ありました。こうなってしまうと、もうお手上げです。ハシゴをかけるにも階段を作るにも良い方法がわかりません。そこで、大雪山の登山道づくりの専門家にもご協力を仰ぎ、なんとか形にすることができました。

トレイル作りが進んでくると、今度はソフト面の整備です。全てのコースはヒグマの住む森です。利用者に安全に道を歩いてもらい、安心して楽しんでもらうためにも、しっかりと作りこんだ情報発信のツールが必要です。そこで、一から新しいレクチャープログラムを作ることにしました。さらに、散策を楽しむためのコースマップが載っているリーフレットや、事前に利用者が目にすることのできる展示の準備も欠かせません。

こうした多岐にわたる準備作業は、スタッフの様々な得意分野があってこそ進められたものです。まさにオール知床財団の取り組みでした。

紅葉が始まり、羅臼岳に初冠雪のあったころ、新たなトレイルはようやく完成しました。最後に標識看板を立てると、急に血の通った道になるような気がしました。トレイルづくりのハイライトは看板立てだったのかもしれません。

トレイルの誘導看板立て

ロングコースの終盤の難所

歩きやすいようにその場にある倒木や石でトレイルを整備

散策前のレクチャー

ロングコースにある開拓小屋

知床自然センター館内の特設展示

ロングコースの中盤

トレイルのメンテナンス

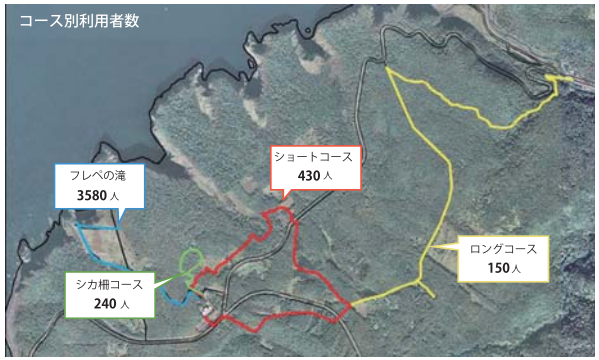
散策後のアンケート

## 実験の経過と結果

実験は、10月14日から31日までの18日間実施されました。期間中、秋の自然センターではまれにみるほどの賑わいが、そこにありました。知床五湖閉園の影響もあり、斜里町全体での観光客は減少した一方で、ホロベツ地区の利用は大きく伸びたことは数字にも表れています。普段は知床五湖で働くスタッフも自然センターに集結し、広報、レクチャー、ツアーの引率、パトロール、トレイルのメンテナンスと、それぞれ役割を担い事業を支えました。

新しいコースの利用者数は、下図のようになっています。やはり、既存のフレペの滝遊歩道の人気が最も高いものの、全体の2割程度の利用者は新規コースである「森づくりの道」を歩いています。「森づくりの道」では、1周3キロ程のショートコースが1番人気で、430人が利用しました。最も長い「ロングコース」にも150人の利用がありました。所要時間も長く、果たして利用者がいるのか不安もありましたが、一定のニーズはあるようです。長い距離を歩くと、帰りの移動が問題となることから、このコースでは帰路をバス利用とする設定にしました。こうした利用形態が広がれば、おのずと公共交通機関の利用が促進されるでしょう。25年以上前にホロベツ地区を整備したそもそもの目的は、自然センターを起点としたシャトルバスシステムの導入でした。知床をじっくりと歩いて楽しむことができるトレイルが、こうした当初の目的を実現させる切り札になるかもしれません。

なによりも、今までは画一的だった利用方法に選択肢が生まれたことに意義があると考えています。魅力ある国立公園には必ず、楽しみ方の選択肢がたくさんあるものです。利用者が訪れる動機や求める体験は誰一人として同じではありません。癒されたい人、驚きや発見を求める人、静寂や孤独を感じにやってくる人・・・。トレイルのバリエーションが増えることは、国立公園での豊かな体験を生み出す基礎となるでしょう。



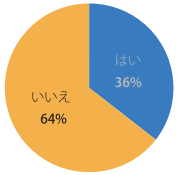

## 利用者の反応

利用者からは様々な感想や意見が寄せられました。「何度も知床に来ていますが、知床は歩く利用が出来る場所がすごく少ないと感じていました。ヒグマの問題もありますが、もっと歩けるコースが増え、自然ともっと触れ合える場所が増えることを期待しています」「歩いて世界遺産を見られるのはとても良いことだと思います。体力別、時間別にコースが設けられていることも良いと思います。歩いて自然遺産にふれ、肌で感じることができました」など、利用のあり方についての感想があったほか、「自然の森を歩くつもりで来たのですが、過去にこんな多くの開拓の歴史があったなんて知りませんでした。とても勉強になりました」「地元にいながら、運動地を見ることはなかなか叶わずとても良い体験ができました。多くの方に体験して欲しいと願います」など、100平方メートル運動の取り組みや森林再生の活動について理解が得られたことは、うれしい結果でした。

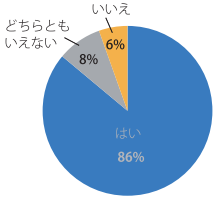
バスを待つロングコース散策者

実際、アンケート調査によると散策前の100平方メートル運動に対する認知は3割にも満たず、その活動については充分に知られていない現状がありましたが、散策後には「理解できた」「興味を持った」と答えた利用者は8割ほどで、普及効果は高いと考えられます。

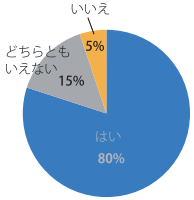
一方で、「もう少し見所があればもっと楽しい山歩きの時間になるのではないでしょうか」「ロングコースの最後の坂道が少しキケンかなと感じた」「ヒグマに関するビデオを自然センターや遺産センターをはじめホテルなどでも見られるようにし、できるだけ多くの人が理解できるようにしてほしい」など、見どころや安全対策に関する課題や要望もありました。



①100平米運動を知っていました？



②100平米運動を理解できましたか？



③100平米運動に興味を持ちましたか？

## ホロベツのこれから

今回の実験は、時代の変化に即した新たな体験や楽しみ方を具体的に提案し、それを具体的なカタチにする機会でした。その過程と結果は、決して100点満点ではありません。むしろ、課題山積になったようにも思います。人の利用があれば、自然環境への影響は避けられません。運動地の保全と再生を担当するスタッフからは、植生や土壌へのダメージを懸念する意見が出されました。特に、急こう配の地形においては、植生保護の観点だけでなく、安全管理の上でも慎重な計画が求められます。また、日々ヒグマ対策に奔走するスタッフからも安全管理上の課題が出されています。例えば、今まで人の利用がなかった場所に立ち入れば、ヒグマの行動を変えてしまうかもしれません。また、道路沿いに出没したヒグマを山に追い返した先は、散策者のいるトレイルだった、という事態も起こり得ます。こうした知床ならではの事情に応じたトレイルのあり方を検討しなければなりません。保護と利用をめぐる典型的な課題のようにも思いますが、両者は対立するものではなく切っても切れない車の両輪のような関係でしょう。

国立公園は多くの利用者に開かれ、感動と楽しみを提供する場所です。私たちは「守ること」と「開くこと」に同じだけの価値を見出し、熱意をもって取り組まなければなりません。そこで求められるのは、異なる意見や価値観を尊重しながら議論を深めていくことのできる柔軟性と、新しいことにチャレンジする姿勢です。

ホロベツ地区の取り組みは、知床の歴史と自然保護の歩みを体感してもらい、楽しんでもらいながら伝える試みでした。この取り組みを基礎に、ホロベツから知床のあらたな利用が始まり、広がっていくような活動をこれからも進めていきたいと考えています。